

琉球大学学術リポジトリ

[調査報告]女子中学生の摂食障害傾向と家族および性別役割志向に関連した社会的価値観についての検討

メタデータ	言語: 出版者: 琉球医学会 公開日: 2015-05-08 キーワード (Ja): キーワード (En): eating disorder, junior high school students, social values, family values, gender roles 作成者: 比嘉, 美来, 豊里, 竹彦, 垣花, シゲ, 太田, 光紀, 眞榮城, 千夏子, 與古田, 孝夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017769

女子中学生の摂食障害傾向と家族および性役割志向に関連した社会的価値観についての検討

比嘉 美来¹⁾, 豊里 竹彦²⁾, 垣花 シゲ³⁾, 太田 光紀⁴⁾,
眞榮城 千夏子³⁾, 與古田 孝夫²⁾

¹⁾琉球大学保健学研究科博士前期課程

²⁾琉球大学医学部保健学科精神看護学教室

³⁾琉球大学医学部保健学科基礎看護学教室

⁴⁾熊本大学大学院医学教育部博士課程

(2013年4月30日受付, 2013年10月23日受理)

Relationship between eating disorder tendency and social values in female junior high school students

Mirai Higa¹⁾, Takehiko Toyosato²⁾, Shige Kakinohana³⁾, Mitsunori Ota⁴⁾,
Chikako Maeshiro³⁾ and Takao Yokota²⁾

¹⁾Graduate School of Medical Sciences Master Course, University of the Ryukyus

²⁾Mental Health Nursing, Department of Health Sciences, University of the Ryukyus

³⁾Primary Nursing, Department of Health Sciences, University of the Ryukyus

⁴⁾Graduate School of Medical Sciences Doctoral Course, Kumamoto University

ABSTRACT

Introduction: The purpose of this study was to clarify the relationship between eating disorder tendency and social values, such as family values, gender roles, and gender equality attitudes associated with female junior high school students. This cross-sectional study was conducted using self-administered questionnaires from June to September 2009. A total of 982 female junior high school students were selected as analysis subjects. We investigated the relationship between eating behavior (Eating Attitude Test-26 Japanese version [EAT-26]), social value questionnaire about the family (refer to The Social Value Questionnaire [SVQ]) and gender roles and gender equality attitudes (The Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes-Short [SESRA-S]). Four groups of disturbed eating behavior were determined based on the EAT-26 score (0 = Non tendency group, 1-4 = low group, 5-14 = medium group, and >15 = high group). Subjects comprised 339 students in 7th grade, 318 students in 8th grade and 325 students in 9th grade. When the eating disorder tendency between the grades of junior high school was compared, no significant differences were found. The results of factor analysis (promax rotation) of the social value questionnaire were classified into four factors. The first was "Public decency", the second was "Stick to achievement", the third was "Dependent on parent" and the fourth was "Efforts for achievement". Multiple comparison relationships between the social value questionnaire and EAT-26 found that the scores for "Public decency", "Stick to achievement", "Efforts for achievement" in the high group and medium group were significantly higher than the scores among subjects in the other groups. The results of a second factor analysis of SESRA-S were classified into three factors. The first was "Traditional gender roles", the second was "Gender roles in parenting" and the third was "Independence of women". The results of multiple comparison relationships between SESRA-S with gender and EAT-26 again showed that the

scores for "Gender roles in parenting", "Independence of women" within the high group were significantly higher than the other groups. These results suggest that perfectionism, over-adaptation to social trends can affect the eating disorder tendency of female junior high school students. *Ryukyu Med. J.*, 32(3,4)95~104, 2013

Key words: eating disorder, junior high school students, social values, family values, gender roles

I. 緒言

摂食障害は10歳代後半から20歳代前半の女性に好発し¹⁾、発症年齢の低年齢化がいわれている²⁾。思春期の発達段階にある女子では、診断基準を満たさなくとも摂食障害に特有な傾向（以下 ED 傾向）をもつ者も多く、ED 傾向を有する者はその後、重度の摂食障害に移行する可能性も指摘されており、早期の介入の必要性がいわれている³⁾。思春期は中学生から高校生の時期を指し、女子においては第二次性徴における身体の変化に始まり、精神面においても、自己への関心が高まる非常に重要な時期であるとされる⁴⁾。みずからの容貌や体型などの外見的なものに美的基準をつくり、意識するところに思春期の特徴があり、身体的変化を意識しはじめ、必要以上に劣等感を抱くなど、身体の外見的变化が心理面にも影響を及ぼすことがいわれている⁴⁾。思春期の訪れとともに現れるこのような心身の変化によって、とくに女子においては、摂食障害傾向やボディ・イメージの不適切な認識、身体変容行動の増加など、認知や行動面の不安定さに影響することが報告されている⁴⁾。また、女性の高学歴化、就業率の増加、未婚率の増加など女性の社会進出にともなう自立的生き方と旧来の伝統的な性役割などの両面的な社会的価値観との狭間において自己実現していかねばならないといった、相剋するストレスフルな状況が摂食障害傾向の増加に関与するなど、社会的価値観が摂食障害にも影響を与えていることが指摘されている⁵⁾。社会的価値とは、対人的な状態や社会のありかたにかかわる価値信念であるとされ⁶⁾、摂食障害と社会的価値観との関連について Ogden J. and Chanana A. ら⁷⁾は、個人や家族に保持された社会的価値観について言及し、摂食障害に関連する家族に関する価値観として、とくに成功・結果（達成）主義や親子関係、物質主義、あるいは女性の性役割に関する価値観などを挙げている。田中⁸⁾は、摂食障害の規定因として社会・文化的要因を取り上げた研究を概観し、伝統的女性観の根強い存在と社会進出の狭間で葛藤状態にある現代女性が、マスメディアによってあられる社会の「痩せ志向」と同調することで自己の空虚感を埋め、さらに自尊心を保持し、極端な痩せへの希求行動の結果、摂食障害をきたすとしている。

ところで、性役割とは男女にそれぞれふさわしいとみなされる行動やパーソナリティに関する社会的期待・規

範およびそれらに基づく行動とされ⁹⁾、思春期に発達する重要な価値観や態度であることが示されている¹⁰⁾。また、性役割を基盤とする性役割志向性とは、中高生の時期に親を通して発達する伝統的価値観や男女平等主義的価値観などを包含した概念¹¹⁾であるとされており¹²⁾、性役割志向性と摂食障害との関係について、Linda A ら¹³⁾の研究では、性役割はボディ・イメージの評価や自尊心と関連しており、それらを含めたさまざまな要因によって媒介され、摂食障害と関連するとしている。また、Rost W ら¹⁴⁾は過食症の女性では性役割における態度と行動との間に大きな矛盾を抱えており、過食症の女性の役割態度はより伝統的役割から解放されたものであるのに対して、実際の行動においては伝統的な役割に非常に高い程度に準拠しているとしている。一方、Elisabeth M.D ら¹⁵⁾は、過食症やダイエットを繰り返す人びとは自尊心が低く、それらの要因について女性らしさや女性の伝統的な性役割は関連しないとしている。このように、性役割と摂食障害との関係について、女性らしさや伝統的な性役割が摂食障害へ与える影響については賛否分かれており、女性の自立的な生き方や社会進出にともない形成された男女平等志向が摂食障害と関連するなどの指摘もあるが、未だ一貫した知見は示されていない。また、心身ともに不安定で自己同一性獲得の時期にあたる思春期における ED 傾向と社会的価値観について検討した研究は著者らの知るところほとんどなされていない。そこで本研究は、女子中学生の ED 傾向と特有の社会的価値観について明らかにすることを目的に、家族および性役割志向に関連した社会的価値観に焦点をあて、検討を行った。

II. 対象と方法

1. 対象

沖縄県南部に位置する A 市の中学校18校のうち同意の得られた6校に在籍する女子生徒を対象に、2009年6月から9月の間に自記式無記名による質問紙調査を行った。今回の対象数6校のうち、2校は全数調査であり、残りの4校のうち2校は学校長の同意の得られた1学年2クラスずつの全6クラス、残り2校は1学年1クラスずつの全3クラスのサンプリング調査であった。対象者1,089名のうち、本研究において摂食障害傾向の測定に使用した Eating Attitude Test -26（以下 EAT-26）の回答

に欠損のない982名（有効回答90.2%）を分析対象とした。

2. 調査内容

学年、性別などの基本属性のほか、EAT-26はGarnerら¹⁶⁾が開発したEAT-26邦訳版¹⁷⁾を使用した。EAT-26は、食事や体重に対する態度や過活動などの神経性食欲不振症（以下AN）患者の主要な臨床症状を簡便に評価するために開発された尺度であり、項目ごとに、「いつもそうだ」から「全くない」までの6段階で回答を求め、配点は先行研究に基づき異常度の高い3段階のみを3点法（いつもそうだ3点、普通はそうだ2点、よくある1点、ときどきある0点、たまにある0点、全くない0点）により配点した¹⁸⁾。EAT-26の分類は先行研究¹⁹⁾を参照し、合計得点が15点以上を高傾向群、0点の者を除く15点未満の者でEAT-26合計得点の平均値を算出し、得点が平均点より高かった者を中傾向群（EAT-26合計得点5～14点）、平均未満に属するものを低傾向群（EAT-26合計得点1～4点）とした。なお先行研究¹⁹⁾においては、合計得点が0点の者は分析対象としていないが、本研究においてはED傾向を有する群と有さない群との比較を行うことで価値観傾向の違いや特徴が明らかとなり、ED傾向と社会的価値観との関連についてより詳細に検討を行うことが出来ると考え、傾向なし群として分析対象に含め、4群に分類した。

今回使用する社会的価値観を測る尺度の選定にあたっては、摂食障害に関連し、中学生を対象とした尺度を用いた先行研究は著者らの知るところ見当たらなかった。そのため、「Achievement（成功、結果主義）」、「Child/Parent relationship（親子関係）」、「Materialism（物質主義）」、「Physical appearance（外見）」、「Competitiveness（競争）」、「Traditional role for women（女性の伝統的役割）」、「Non-traditional role for women（女性の非伝統的役割）」といった価値観を総合的に含むOgden Jら⁷⁾により開発されたアジア女性特有の価値観を評価するための指標である35項目からなる価値観質問票⁵⁾を参照し、独自に「家族に関する価値観」として質問票を作成した。その際、研究目的および対象者が女子中学生であることを考慮し、「Traditional role for women（女性の伝統的役割）」、「Non-traditional role for women（女性の非伝統的役割）」に関する質問については、本研究で使用した男女平等主義的価値観と内容が重複し、また抽象度が高く内容が高度であることから、女子中学生には回答が難しいと判断し調査指標から除いた。したがって、残りの19項目のみを使用し、その日本語版を独自に作成した。日本語訳の妥当性については共同研究者間で検証するとともに、小学校高学年から中学生の10名を対象にプレテストを行い語句の加筆修正を加えた。プレテストの結果から、「幸せであることは物質的な富や財産を得るよりも重要である」

の1項目については、内容が理解されにくかったため削除し、残りの18項目を設問した。回答は「全くその通りだと思う」から「全然そう思わない」までの4件法で行い、4点から1点を配点した。

男女平等主義的価値観に関する尺度の選定にあたっては、摂食障害に関連する男女平等主義的価値観を含み、中学生を対象とした尺度を用いた先行研究は見当たらず、そのため、対象者として20歳以上の男女が想定されているが、男女平等主義的価値観を含む性役割態度を簡便に測定できる尺度として妥当性があり、かつ広く利用されている鈴木⁹⁾によって開発された平等主義的性役割スケール短縮版（以下SESRA-S）を使用した。本スケールは、男女の性役割態度における平等志向性、あるいは伝統志向性のレベルを客観的に測定する15項目から構成されるスケールであり、回答は「全くその通りだと思う」から「ぜんぜんそう思わない」の5段階で評定を行い、5点から1点を配点した。

3. 解析方法

家族に関する価値観については、価値観が多様に発達し、不安定で個人差の大きい思春期特有の中学生の時期²⁰⁾に相応の社会的価値がある可能性があること、また、価値観を多面的にみることで思春期におけるED傾向のより細やかな心性を検討することができる可能性を考慮し、主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行い、対象に合わせた価値観因子として再構成した。また、SESRA-Sは、一般に単純加算得点をもって尺度得点とし、得点が高いほど性役割に対して平等主義的であり低いほど伝統主義的であると判断する。しかし、Ujiら²¹⁾は成人を対象とした平等主義的性役割に関する調査結果から、民族、ジェンダー、世代などの文化的違いによる影響に留意する必要があることを指摘し、SESRA-Sについて探索的及び確認的因子分析を行い対象に合わせた因子構造に構成しなおし分析を行っている。このことを踏まえ、本研究においては、対象が中学生でありスケールの想定する年代と異なること、また、価値観が多様に発達し、不安定で個人差の大きい思春期にあたる中学生にとっては、性役割に対して平等主義に関する価値観を一つの価値観として判断することは適切ではなく、価値観を多面的にみることで思春期におけるED傾向のより細やかな心性を検討することができる可能性を考慮し、主因子法による探索的因子分析を行い、対象に合わせた価値観因子として再構成した。

尺度の信頼性を確認するために、抽出された因子ごとにCronbachの係数を算出した。家族に関する価値観およびSESRA-Sについては、Kolmogorov-Smirnov検定において分布の正規性を確認したところ正規性が認められなかったため、ED傾向群と両価値観との群間比較にはKruskal Wallis検定を用い、多重比較にはMann-WhitneyのU検定を使用し、Bonferroni法に

よる補正により、有意水準を調整した。統計解析には SPSS ver.15.0J を使用した。

倫理的配慮として、学校長から研究協力について同意書を得て後、クラス担任が説明書による説明を対象者に行い、回答を求めた。その際、アンケートへの参加は任意であることを強調し協力依頼を行い、最終的に研究協力で同意の得られた生徒に質問紙を配布した。なお、本研究は琉球大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

III. 結果

1. ED 傾向の学年別の比較

女子中学生の学年ごとの内訳をみると、1年生339名 (34.5%)、2年生318名 (32.4%)、3年生325名 (33.1%) であり、学年別の ED 傾向の比較結果では (Table 1)、学年が上がるにともない高傾向群の占める割合は高かったが、統計学的に有意ではなかった ($p = 0.107$)。

2. 家族に関する社会的価値観の因子分析結果および ED 傾向との群間比較

家族に関する社会的価値観18項目について、主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果、4因子が抽出され、さらに、各因子ごとに主成分分析を行い、一元性を確認し最終的に価値観因子を確定した。(Table 2)。第1因子 (Cronbach $\alpha = 0.76$) には「他の人にあなたの最善の努力を見せることは重要である」、「親にとって、持っている以上のもの(こと)を子どもに与えることは重要なことである」などの「体裁主義」に関する因子が、第2因子 ($\alpha = 0.74$) には「金持ちになることは重要なことだ。」、「何をするにも、成功すること、または一番になることは重要である。」などの「成功・結果主義」に関する因子が、第3因子 ($\alpha = 0.54$) には「子どもは、親の期待にこたえなければならぬ」、「子どもは、自分の幸せを手放してでも親の自慢に思われるようになるべきだ」とする「親への従順」に関する因子が、第4因子 ($\alpha = 0.62$) には「物事をうまくできるように努力し続けることは重要なことだ。」

Table 1 Comparison of Eating disorder tendency between the grade of junior high school

		Non tendency	Low	Medium	High	n (%)
7th grade	(n = 339)	105 (31.0)	122 (36.0)	90 (26.5)	22 (6.5)	0.107
8th grade	(n = 318)	89 (28.0)	128 (40.3)	79 (24.8)	22 (6.9)	
9th grade	(n = 325)	84 (25.8)	105 (32.3)	104 (32.0)	32 (9.8)	

Chi-square test

Table 2 Factor analysis (promax rotation) of the social value questionnaire about the family

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4
Factor1: Public decency ($\alpha = 0.76$)				
18. It is important to look your best in public	0.73			
11. It is important for parents to give their children more than they had	0.68			
16. It is important to be concerned about what the community think and say about the family	0.67			
10. A child's success is the sign of a good family	0.62			
12. It is important to do things better than the people you know	0.61			
17. It is important to be surrounded by nice possessions	0.60			
Factor2: Stick to achievement ($\alpha = 0.74$)				
2. It is important to become rich		0.81		
1. It is important to be successful/ reach the top in whatever you do		0.67		
8. Material wealth should bring respect in the community		0.67		
15. It is important to have a high status within your community		0.66		
14. It is important to make the most part of you physical appearance		0.51		
Factor3: Dependent on parent ($\alpha = 0.54$)				
5. Children should fulfill their parents dreams			0.76	
3. Children should make their parents proud at any cost to their own happiness			0.73	
Factor4: Efforts for achievement ($\alpha = 0.62$)				
13. It is important to continually strive to do better				0.65
7. How you look is an important part of who you are				0.64
6. It is not enough to do your best you should always do better				0.57
9. It is important not to bring shame to the family				0.57
4. It is important to achieve academically				0.51
Variance explained by each factor	5.73	1.42	1.19	1.03
Contribution (%)	31.84	7.87	6.62	5.72
Cumulative contribution (%)	31.84	39.71	46.33	52.05

Table 3 Relationship between the social value questions about the family and EAT-26

	Non tendency ^a		Low ^b		Medium ^c		High ^d		P-value	Multiple comparison
	Mean (SD)	Median	Mean (SD)	Median	Mean (SD)	Median	Mean (SD)	Median		
Public decency	14.1 (3.4)	14.0	15.1 (3.4)	15.0	15.7 (3.3)	16.0	16.7 (4.0)	17.0	p < 0.001	a < b < c , d
Stick to achievement	11.2 (2.8)	11.0	12.1 (2.8)	12.0	12.9 (2.9)	13.0	13.8 (3.0)	14.0	p < 0.001	a < b < c , d
Dependent on parent Efforts for achievement	3.5 (1.2)	3.0	3.7 (1.3)	4.0	3.7 (1.3)	4.0	4.1 (1.6)	4.0	0.048	
	13.5 (2.8)	14.0	14.2 (2.4)	14.0	15.0 (2.6)	15.0	15.4 (2.5)	15.0	p < 0.001	a < b < c , d

Kruskal Wallis test, Multiple comparison Man-Whitney U test with Bonferroni correction.

a=Non tendency group, b=Low group, c=Moderate group, d=High group

、「ものの見方は、あなたの重要な部分である。」などの「成功への努力」に関する因子が得られ、4因子のCronbachの値は0.5~0.7の範囲で、必ずしも高いとはいえないが、各価値観を構成する項目内容を吟味した結果、概ね妥当と判断し、以下の解析を行った。

ED傾向と家族に関する社会的価値観4因子との比較結果をみると (Table 3), 第1因子の「体裁主義」(p < 0.001), 第2因子の「成功・結果主義」(p < 0.001), 第3因子の「親への従順」(p = 0.048), 第4因子の「成功への努力」(p < 0.001) のいずれの因子においても有意差を認めた。多重比較の結果でみると、第1因子「体裁主義」および第2因子「成功・結果主義」、第4因子の「成功への努力」では傾向なし群、低傾向群、中傾向群および高傾向群の順に得点が有意に高かった。なお、第3因子の「親への従順」では、群間で有意な得点差を認めなかった。

3. 男女平等主義価値観の因子分析結果およびED傾向との群間比較

男女平等主義価値観尺度 (SESRA-S) の15項目について、探索的因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を行った。なお、各因子とEAT-26による群間の比較の際には、因子傾向が高くなるに伴い得点が高くなるように項目得点を揃えた。また、SESRA-S15項目のうち「結婚後、妻は必ずしも夫の名字を名乗る必要はなく、旧姓で通しても良い」の項目については、中学生には理解が難しく、本項目を含めることにより因子のCronbachの係数が低く算出 ($\alpha = 0.39$) されたため除外し、再度因子分析を行った。その結果、3因子が抽出され、さらに、各因子ごとに主成分分析を行い、一元性を確認し最終的に価値観因子を確定した。(Table 4), 第1因子 ($\alpha = 0.84$) には「女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である」、「結婚

Table 4 Factor analysis (promax rotation) of SESRA-S

	Factor1	Factor2	Factor3
Factor 1: Traditional gender roles ($\alpha = 0.84$)			
4. Women at home and men at work	0.75		
2. Important issues should be decided by husbands	0.74		
3. Working wives cause marital disharmony	0.73		
1. Women in high social positions have difficulty getting married	0.71		
5. Working women put a strain on the family	0.70		
10. Daughters should be raised to become housewives and sons to have jobs	0.67		
11. Women should work part-time because they have to raise children	0.65		
Factor 2: Gender roles in parenting ($\alpha = 0.64$)			
15. Women should not get a job with responsibility and competition		0.74	
14. Women do not have to work if there is no economic need		0.67	
8. Bringing up children is the most important job for women		0.65	
9. It is important to raise a boy to be masculine and a girl to be feminine		0.63	
Factor 3: Independence of women ($\alpha = 0.67$)			
12. Working outside is equally important for women			0.81
13. Women should work even after having a child			0.79
7. Domestic chores should be shared between spouses			0.69
Variance explained by each factor	4.50	1.97	1.11
Contribution (%)	32.15	14.06	7.96
Cumulative contribution (%)	32.15	46.21	54.18

Table 5 Relationship between SESRA-S with gender and EAT-26

	Non tendency ^a		Low ^b		Medium ^c		High ^d		P-value	Multiple comparison
	Mean (SD)	Median	Mean (SD)	Median	Mean (SD)	Median	Mean (SD)	Median		
Traditional gender roles	14.1 (5.1)	14.0	14.3 (4.9)	14.0	15.1 (5.6)	15.0	15.8 (5.4)	16.0	0.046	
Gender roles in parenting	12.2 (3.3)	12.0	12.8 (3.0)	13.0	12.9 (3.1)	13.0	13.6 (3.0)	14.0	0.005	a < d
Independence of women	10.0 (2.6)	10.0	10.5 (2.3)	11.0	11.0 (2.5)	11.0	11.2 (2.4)	11.0	p < 0.001	a < c, d

Kruskal Wallis test, Multiple comparison Man-Whitney U test with Bonferroni correction.

a=Non tendency group, b=Low group, c=Moderate group, d=High group

生活の重要事項は夫が決めるべきである」などの「古典的性役割」に関する因子が、第2因子 ($r = 0.64$) には「女性は家事や育児をしなければならないから、あまり責任の重い仕事をしない方がよい」、「生活するのにお金の不自由がなければ、女性は働かなくてもよい」などの「伝統的家庭内役割」に関する因子が、第3因子 ($r = 0.67$) には「女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をするのもそれと同じくらい重要である」、「女性は子供が生まれても、仕事を続けた方がよい」などの「女性の自立性」に関する因子が得られ、各因子の Cronbach の 係数は0.6~0.8の範囲であり、概ね妥当な内的整合性を有していた。

ED 傾向と抽出された男女平等主義価値観3因子との比較をみると (Table 5), 第1因子の「古典的性役割」($p = 0.046$), 第2因子の「伝統的家庭内役割」($p = 0.005$), 第3因子の「女性の自立性」($p < 0.001$) のいずれの因子においても有意差を認めた。多重比較の結果、第2因子の「伝統的家庭内役割」では、傾向なし群に比べ高傾向群の得点が有意に高かった。第3因子の「女性の自立性」では、傾向なし群に比べ、中傾向群および高傾向群の得点が有意に高値を示した。なお、第1因子「古典的性役割」では、群間で有意な得点差を認めなかった。

IV. 考察

1. ED 傾向の学年別の比較

ED 傾向について学年ごとの比較結果をみると、有意差は認められなかったものの学年が上がるにともない ED 傾向も高く、3年生で最も高値を示した。中学生を対象に瘦身願望について調査した先行研究では⁴⁾、瘦身願望は中学3年生で最も高く、学年があがるにともない高くなることが報告されている。また ED 傾向は中学生女子では3年生で最も高いことが報告されており²⁾、今回の結果もこれを裏づけるものであった。思春期は急激な身体発達や性的成熟によって、自己の身体を強く意識し始めるとともに、急速に身体への関心を高めていく時期であり、また、容貌や体型など他者と比較した自己

像に劣等感を抱きやすく、他者からの社会的評価を自己の身体的要因に過度に帰属させてしまうことや、親子関係や友人関係が大きく変化する時期でもある²²⁾。今回の結果は、こうした思春期特有の心性が中学生では学年があがるに伴い身体および心理社会的発達とあわせて、ED 傾向を高めたことが推察される。

2. 家族に関する社会的価値観と ED 傾向との関連

家族に関する価値観項目の因子分析の結果、「体裁主義」、「成功・結果主義」、「親への従順」、「成功への努力」の4因子が抽出された。抽出された4因子のうち、第1因子の「体裁主義」と ED 傾向との関連をみると、傾向なし群、低傾向群、中傾向群および高傾向群の順に得点が有意に高く、ED 傾向が高くなるにともない「体裁主義」価値観因子も高くなることが示された。女子中学生の特徴として、男子に比べて対人関係が広く、集団への同調傾向やまわりの目を気にする傾向の強いことが報告されている²³⁾。また、摂食障害には「自分に対する自信がない」、「人からよく思われたい」、「まわりから認められたい」など、周囲の目を気にし、必要以上にまわりに合わせる傾向のみられることがいわれており、こうした対人関係への過剰適応の結果、ストレスが昂じ、そのはけ口として食行動異常が生じ摂食障害をもたらす可能性が指摘されている²⁴⁾。また、齊藤ら²⁵⁾は、摂食障害には「相互依存的自己理解」、すなわち社会が要請する価値規範に過剰に適応しようとする傾向が強いといった個人的特性が影響を与えていることを指摘し、社会が要請する女性像に過剰に適応し、他者による評価への過度な偏重が、自尊感情の低下や摂食障害を形成する一因となることに言及している。今回の結果から、体裁主義傾向が高くなるにともない ED 傾向も高くみられたことから、こうした社会が要請する価値規範やまわりへの過度な適応行動が、ED 傾向を助長する誘因として影響した可能性が推測される。

家族に関する価値観の第2因子には「成功・結果主義」に関する因子が、第4因子には「成功への努力」に関する因子が抽出され、いずれも「成功」に関わる因子で構成されていた。抽出された2因子と ED 傾向との関連を

みると、第2因子の「成功・結果主義」では傾向なし群、低傾向群、中傾向群および高傾向群の順に得点が有意に高く、ED傾向が高くなるにともない「成功・結果主義」の価値観因子も高くなることが示唆された。「成功・結果主義」は、他人よりも成功したい、すぐれていると認められたいという自己評価を重要視する価値観因子から構成されている。有吉ら²⁶⁾は摂食障害の病前性格として、几帳面で完璧主義、頑固さや強迫的、自己中心性などを指摘しており、こうした性格傾向が成功・結果主義の価値観に影響したことが考えられる。第2因子と同様に、第4因子の「成功への努力」においても、傾向なし群、低傾向群、中傾向群および高傾向群の順に得点が有意に高かった。第4因子の「成功への努力」の価値観因子は「物事を成功させたい」、「努力すべきなのに出来ていない」といった、自己への高い基準設定やみずからの行動を律し厳格な評価を行う因子であり、完全主義的な性質とも関連している。完全主義は、過度に完全性を追求するパーソナリティとされており、摂食障害と関連する心理的要因の一つにあげられている^{27, 28)}。なかでも、完全主義の自己への厳しい基準設定や評価は、失敗を回避し完璧さを希求する努力として現れ、これが体重、体型、食事のコントロールといったダイエット行動に影響すると、自分自身に非現実的で厳しい減量基準を設定し厳格な食事制限を行うなど、摂食障害につながる可能性が指摘されており^{29, 30)}、今回の結果は、こうした完全主義傾向および、成功や結果を追い求める希求行動がED傾向に影響を与えている可能性を示唆していると考えられる。また、完全主義に関する背景要因として、近年摂食障害に広汎性発達障害やアスペルガー障害が併存している症例も報告されており^{31, 32)}、これらの発達障害に特有の強い固執性や強迫性、完全主義傾向³³⁾が摂食障害に影響している可能性がいわれている³⁴⁾。こうした発達障害特有の性格特徴が成功・結果主義傾向と関連してED傾向に影響を与えている可能性も考えられる。

3. 男女平等主義価値観とED傾向との関連

男女平等主義価値観の因子分析の結果、「古典的性役割」、「伝統的家庭内役割」、「女性の自立性」の3因子が抽出され、「古典的性役割」および「伝統的家庭内役割」の2因子は、いずれも女性の伝統的性役割に関する因子で構成されていた。第2因子の「伝統的家庭内役割」においては、傾向なし群に比べ高傾向群の順に因子得点が高値を示しており、ED傾向が高くなるにともない伝統的家庭内役割の価値観因子も高くなることが示唆された。山田⁵⁾は、摂食障害では女性の伝統的役割傾向が健常対象群と比較して高く、より主体的に自分の人生を選択し、夫婦間は平等であるといった非伝統的な女性の役割より、結婚すれば家庭に入り、夫や家族のために尽くすといった伝統的な役割をより重要視することを指摘している。また、齊藤²⁵⁾は女性らしい伝統的な役割分業を肯定し、

女性らしくあるべきとした文化に規定された行動規範に従った結果、やせ希求行動が顕在化することを指摘し、社会化の過程を通じて女性性に関連した心理的特長や行動パターンの学習の結果、自己主張する力や問題を率直な形で処理する力が欠如し、社会が要請する女性像に過剰に適応することに言及している。このことから、今回の結果は女性の伝統的役割を重視し、女性らしくあるべきとした伝統的社会規範や痩身を美しさの基準とした社会的価値観や社会文化的風潮に関する過剰な適応、あるいは誤った認識に規定された行動に過度に準拠した結果、やせ願望が強まりED傾向を高めた可能性が考えられる。

第3因子の「女性の自立性」因子とED傾向との関連では、傾向なし群および低傾向群に比べ高傾向群の得点が高値を示しており、ED傾向が高くなるにともない「女性の自立性」に関する価値観も高くなることが示唆された。日本における摂食障害の増加は、第二次世界大戦以降の産業化、都市化、伝統的な家族構造の崩壊といった社会の変化の影響を受けていることが指摘されている⁵⁾。また、女性の高学歴化、就業率の増加、種々の規制からの解放による経済的自立や社会参画に伴い、女性の社会的地位は向上し、みずからの自己実現に向けより主体的に人生を選択するなど、女性のライフスタイルも多様化している。今回の結果においてED傾向の高い生徒がより女性の自立性を志向する価値観傾向も高くみられたことから、こうした女性の自立した生き方を希求する価値観傾向がED傾向にも影響を及ぼしている可能性が考えられる。一方で、前述の結果で示されたように、「伝統的家内役割」のような子育てに関する旧来の伝統的価値観と、本結果のようなジェンダー意識を含む「女性の自立性」に関する価値観の共存は、二律背反する矛盾した葛藤の存在として示唆される。摂食障害と女性役割に関する論考の一つに、社会から期待される役割の多様化に伴う葛藤の存在があげられており、男性役割が社会から期待される役割と個人が望む役割像との間に矛盾が少ないのに対して、女性役割はそのずれが生じやすく³⁵⁾、性役割に関する葛藤を抱きやすいゆえ、摂食障害の発症の遠因となっているのではないかとする指摘もある³⁶⁾。また、戦後のライフスタイルの選択肢が多様化する一方で、男女間の性的役割分担は解消しておらず、伝統的な性的役割分担が存在するなかで主体的に人生を選択し、自己実現への選択肢が自由になるにともない、「自分らしさ」、「女性らしさ」、「理想の女性像」の追求をめぐる葛藤が強くなることがいわれている^{5, 37)}。さらに、最近では過食症が急増しており、その背景には女性の社会進出、父親役割の変化と弱体化、男女平等教育と現実社会のギャップに伴う心理社会的ストレスの増大などがその一因としてあげられている³⁸⁾。このように、社会の変遷の中で女性に期待される役割が変化し、もともとある伝統的な女性役割と女性の自立的な生き方を支

持する価値観どうしの葛藤が ED 傾向や摂食障害の増加に影響を与えている可能性が推察され、社会全体の価値観が与える影響も吟味しつつ、生徒らが葛藤を乗り越え、多様な価値観のなかから、自分に適した価値観を柔軟に選び取っていきけるような指導や援助も今後は重要になってくると考える。

これまで摂食障害への治療的介入方法の実際については、精神療法的アプローチとして心理教育や認知行動療法や力動的な精神療法、対人関係療法、あるいはセルフヘルプおよび集団療法や家族療法など、多くの技法があげられ、身体的アプローチとしては薬物療法、入院、栄養療法などが紹介されている³⁹⁾。さらに、交流分析療法⁴⁰⁾やヨガを併用した認知行動療法的アプローチ⁴¹⁾など、多くの治療介入方法が実証されている。今回の調査結果から ED 傾向が高い生徒には体裁主義や成功・結果主義および成功への努力、あるいは伝統的家庭内役割や女性の自立性などといった、葛藤する価値観の存在が示唆されたことから、こうした価値観の歪みの修正や調和を目指した認知行動療法的アプローチや、対人関係療法などを取り入れた予防的介入方法も有用であると考えられる。また、高宮ら⁴²⁾が中学生に対して、講義や生徒たちの自主研究指導、問題ケースに対する定期的な面談などを通して啓発活動を行った事例を紹介しており、若い世代への予防的介入として、身体に対する非現実的な認知や価値観を修正する認知修正技法と健康的な摂食行動や体重コントロール、ED に関する知識教育などを、講義とディスカッション形式を通しての介入研究が報告され、効果をあげている⁴³⁾。今回の研究では対象が中学生ということもあり、ED 傾向への予防的介入として、こうした講義や自主研究、面談などを通じた啓発活動など、女子中学生に適した主体的・実践的に取り組める介入技法も有用であると考えられる。

V. まとめ

本研究では、女子中学生の ED 傾向と家族および男女の性役割、平等意識などの社会的価値観との関連について検討した。その結果、ED 傾向にある女子中学生では、「体裁主義」、「成功・結果主義」、「成功への努力」、「伝統的家庭内役割」、「女性の自立性」に関する価値観傾向が高く、成功を求める完全主義的傾向や、社会的規範に過剰適応的な性質、女性の伝統的役割や自立性に関する性役割葛藤が ED 傾向に影響している可能性が示唆された。

今後の課題として、本研究は沖縄県の一地区を対象としたものであり、摂食障害傾向を持つ女子中学生全体の傾向とすることには限界がある。本調査の対象者の選定に関しては、6校のうち2校は全数調査であり、残りの4校のうち2校は学校長の同意の得られた1学年2クラスずつの全6クラス、残り2校は1学年1クラスずつの全3クラ

スのサンプリング調査であるが、全母集団およびサンプル数を明らかにすることができず、母集団のどの程度を反映しているのかを推測することができなかった。また、社会的価値観を測定するために使用した「家族に関する価値観」は価値観質問票⁷⁾を参考に筆者らが独自に日本語版を作成したものであるが、日本語版の尺度を作成する際に必要な手続きが正しく行われておらず、また、因子分析により対象に合わせた因子構造に独自に再構成していることから、精神測定学的妥当性が低いことが考えられる。今後は、本研究のこうした課題をふまえ、妥当性が高く、中学生に適した価値観尺度を開発し、検討を行う必要があると考える。また、ED 傾向と性役割に関する社会的価値観との関連について、今回は女子生徒のみに焦点をあてて検討を行ったが、今後は男子生徒と併せて比較することで、性差を考慮した ED 傾向の特徴を明らかにする必要があると考える。さらに、本研究においては対象者の心身の健康状態や家族構成、社会経済状態などの交絡因子の影響についての検討がなされておらず、今後こうした要因を考慮に入れ、詳細に検討を行う必要がある。

最後に、思春期はさまざまな経験のなかで価値観が多様に変化、発達する時期であり、今回のような横断的研究だけでは女子中学生の価値観の多様性や変化について十分に言及することは難しい。今後、発達段階を考慮した中長期的な縦断的調査研究を行うことで、女子中学生の持つ価値観が ED 傾向に与える影響について明らかにしていく必要があると考える。

文 献

- 1) 井上幸紀：病因と発症機序。新しい診断と治療の ABC 47精神4摂食障害, 切池 信夫 (編), pp.42-48, 最新医学別冊, 大阪, 2001.
- 2) 中村このゆ：小学生と中学生の摂食態度 - 群馬県と大阪府の比較 - . 心身医学48 (12) : 1043-1047, 2008.
- 3) 菊池真美, 國方弘子：大学生の対人ストレスと摂食障害傾向との関連 - ストレスモデルを用いて - . 日本看護学会誌14 (2) : 138-146, 2005.
- 4) 川田 麗：思春期の女子における瘦身願望と自己受容の関連. 臨床発達心理学研究 (8) : 16-26, 2009.
- 5) 山田 恒：摂食障害患者の社会的価値観. 大阪市医学会雑誌56 (3) : 95-102, 2007.
- 6) 古畑和孝：社会心理学小辞典 有斐閣小辞典シリーズ, 古畑和孝 (編), pp102, 株式会社有斐閣, 東京, 1991.
- 7) Ogden J. and Chanana A. : Explaining the effect of ethnic group on weight concern: finding a role for family values. International

- Journal of Obesity and Related Metabolic Disorders. 22(7): 641-647, 1998.
- 8) 田中有可里：展望 摂食障害に対する痩せ志向文化の影響. カウンセリング研究34 (1) : 69-81, 2001.
 - 9) 鈴木淳子：平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA - S) の作成. 心理学研究65 (1) : 34-41, 1994.
 - 10) 伊藤裕子：青年期女子の性同一性の発達 - 自尊心, 身体満足度との関連から -. 教育心理学研究49 (4) : 458-468, 2001.
 - 11) 伊藤葉子：中・高校生の性役割観と親性準備性との関連性の検討 家庭教育研究所紀要26 : 5-13, 2004.
 - 12) Dreyer N.A., Woods N.F. and James S.A. : A scale to measure sex role orientation. Sex Roles. 7(2): 173-182, 1981.
 - 13) Linda A. Jackson, Linda A. Sullivan. and Ronald Rostker : Gender, Gender Role, and Body Image. Sex Roles. 19(7/8): 429-443, 1988.
 - 14) Rost W, Neuhaus M. and Florin I : Bulimia nervosa: sex role attitude, sex role behavior, and sex role related locus of control in bulimarexic women. Journal of Psychosomatic Research. 26(4): 403-408, 1982.
 - 15) Elisabeth M. D. and Meg G.: Psychological Profiles of Purging Bulimics, Repeat Dieters, and Controls. Journal of Consulting and Clinical Psychology 54(3): 283-288, 1986.
 - 16) Garner D.M. and Garfinkel P.E. : The eating attitudes test : An index of the symptoms of anorexia nervosa. Psychological Medicine. 9: 273-279, 1979.
 - 17) 馬場謙一, 坪井さとみ : EAT - 26の有効性. 厚生省特定疾患神経性食欲不振症調査研究班平成4年度報告書: 80-86, 1994.
 - 18) 堀田千津子, 高田晴子 : 摂食障害早期発見のための簡易質問票の妥当性の検討 - 摂食態度得点の試み -. 教育医学49 (4) : 260-268, 2004.
 - 19) 山蔦圭輔, 中井義勝, 野村 忍 : 食行動異常傾向測定尺度の開発および信頼性・妥当性の検討. 心身医学49 (4) : 315-323, 2009.
 - 20) 向井隆代 : 思春期の身体的発達と心理的適応 - 発達段階および発達タイミングとの関連 -, カウンセリング研究43 (3) : 202-211, 2010.
 - 21) Uji M, Shono M, Shikai N, Hiramura H. and Kitamura T: Egalitarian sex role attitudes among Japanese human service professionals: Confirmatory factor analytic study, Psychiatry and Clinical neurosciences. 60(3): 296-302, 2006.
 - 22) 池田かよ子 : 思春期女子のやせ志向と情緒的サポート, 体型および初潮との関係. 新潟青陵大学紀要6 : 55-67, 2006.
 - 23) 深谷昌志 : 「元気な女の子」と「ほどほど志向の男の子」. モノグラフ中学生の世界73, pp.18-19, ベネッセ教育研究所, 岡山, 2002.
<http://a111.g.akamai.net/f/111/143111/15m/benese1.download.akamai.com/143111/j/monographpdf/2/2-vol-73.pdf>
 - 24) 金城東和, 鎌形英一郎, 菊次佐千代, 喜瀬公亮, 喜多麻衣子, 北原裕一, 吉良 聡, 鈴木 翔, 金子 誉 : 摂食障害の心理・社会的要因. 精神医学44 (1) : 97-103, 2002.
 - 25) 齊藤千鶴 : 摂食障害傾向における個人的・社会文化的影響の検討. パーソナリティ研究13 (1) : 79-90, 2004.
 - 26) 有吉允子, 匹田幸余 : 摂食障害 - その要因と支援 -. 子どもの心とからだ, 日本小児心身医学会雑誌第9 (1) : 20-28, 2000.
 - 27) 山形 俊, 野崎剛弘, 瀧井正人, 河合啓介, 森田千尋, 井尾健宏, 横山寛明, 日高三喜夫, 久保千春 : 強迫性を有する神経性食欲不振症患者の臨床的特徴および完全主義について. 心身医学49 (1) : 57-66, 2009.
 - 28) Chang E.C., Ivezaj V., Downey C.A., et al.: Complexities of measuring perfectionism : Three popularperfectionism measures and their relations in a female college student sample. Eating Behaviors. 9(1): 102-110, 2008.
 - 29) 矢澤美香子, 金築 優, 根建金男 : 青年期女子における完全主義認知とダイエット行動および摂食障害傾向との関連. 日本女性心身医学15 (1) : 154-161, 2010.
 - 30) Bardone-Cone A.M.:Self-oriented and socially prescribed perfectionism dimensions and their associations with disordered eating. Behaviour Research and Therapy. 45(8): 1977-1986, 2007.
 - 31) 奥平裕子 : 摂食障害における自閉性傾向の検討 - 自閉性スペクトラム指数(AQ)を用いた調査から -. 心身医学48 (5) : 339-348, 2008.
 - 32) 高宮静男, 針谷秀和, 植本雅治, 川本 朋, 井戸りか, 山本欣哉, 清田直俊, 佐藤倫明 : アスペルガー障害を伴った神経性無食欲症. 心身医学45 (9) : 719-726, 2005.
 - 33) 林 陽子, 吉橋由香, 田倉さやか, 辻井正次 : 高機能広汎性発達障害児を対象とした完全主義対応プログラム作成の試み. 小児の精神と神経50 (4) : 407-417, 2010.
 - 34) 宮本信也 : 小児の摂食障害 - 小児科における診療

- 実態:神経性食欲不振症を中心に - . 心身医学49 (12) : 1263-1269, 2009.
- 35) 伊藤裕子: 性役割の評価に関する研究. 教育心理学研究26 (1) : 1-11, 1978.
- 36) 田子裕子, 岩脇三良: 摂食障害と個人・家族・社会的変数との関連性について. 学苑 (昭和女子大学近代文化研究所) 684 : 100-116, 1997.
- 37) Pike K.M. and Borovoy A. : The rise of eating disorders in Japan: issues of culture and limitations of the model of "westernization". Culture Medicine Psychiatry. 28: 493-531, 2004.
- 38) 武井美智子: 心理・生理・行動面からみた摂食障害の慢性化要因. 心身医学44 (12) : 911-918, 2004.
- 39) 永田利彦: 摂食障害に対する精神療法的アプローチについて 摂食障害の臨床をめぐって,2011年,第52回日本心身医学会総会ならびに学術講演会(横浜). 心身医学52 (4) : 277-285, 2012.
- 40) 新里里春: 交流分析を中心に 特別企画: 心理療法 - 先達に聞く -,2007年,第48回日本心身医学会総会(福岡). 心身医学48 (8) : 705-710, 2008.
- 41) 筒井順子, 中野 完, 村永鉄郎, 鈴木伸一, 野添新一, 乾 明夫: ヨーガと認知行動療法を行った摂食障害合併1型糖尿病の1症例. 心身医学48 (9) : 803-808, 2008.
- 42) 高宮静男, 針谷秀和, 加地啓子, 大波由美恵, 佐藤倫明, 田中真理江, 細川愛美, 川上英子, 角田信子, 大下隆司, 植本雅治: 小児摂食障害予防における養護教諭による学校内での啓発活動. 心身医学47 (3) : 213-218, 2007.
- 43) 三井智代: 女子大学生における摂食障害予防介入プログラムの効果: 7か月後までの追跡調査. 思春期学24 (4) : 581-589, 2006.